

報 告

母性看護学実習における学生の看護技術の現状と課題

Nursing technique of the student in the motherly nursing science training The present conditions and problem

前山 直美 山本 江里子 石川 智子

Naomi MAEYAMA, Eriko YAMAMOTO, Tomoko ISHIKAWA

(神奈川歯科大学短期大学部 看護学科)

キーワード：母性看護学実習 看護技術 経験 学習 学生

要旨

本研究では、本学の母性看護学実習における学生の看護技術経験状況を明らかにし、学内演習項目が母性看護学実習の効果的な内容を検討する資料とするところである。分析に用いたのは、本学の「卒業時における看護技術到達チェックリスト」(計136項目)をもとに作成した「母性看護学実習技術経験アンケート」(51項目)である。

本学3年次学生85名に対し、妊娠期は、「子宮底長・腹囲の測定」「レオポルド触診法」が学生の半数以上見学および実施していた。分娩期では、ほとんどが見学であるが、「産痛緩和」は、11名が実施していた。産褥期では、「バイタルサイン測定」「全身状態の観察」「子宮復古の観察」「乳房の観察」は、ほぼ全員の学生が実施していた。新生児期では、「生理的变化の観察」「感染予防」「おむつ交換」「授乳中の観察」「衣服の着脱」が学生の半数以上実施できていた。

妊娠・分娩・産褥期および新生児期の看護実習において、見学および実施した看護技術は、学内演習で実施している演習内容と一致していることがわかった。これらは、母体の生理的变化や妊婦・胎児の身体的健康状態のアセスメント・分娩期の看護の実際・指導場面の見学を通して、産褥期における日常に関することや生活育児技術に関わる援助を学べており、新生児期の観察技術や育児指導技術についても同様であった。

今後の課題として、妊娠期のマイナートラブルや日常生活のアセスメントの学習と学内の妊娠期に必要な看護技術経験が一致できるように学習支援をすることや分娩の立会いが少ない中で分娩期の看護について学内での学習をどう補うのかが示唆された。

はじめに

本学の母性看護学実習のねらいは、妊・産・褥婦と新生児期の特徴を理解し、看護過程を通して対象に必要な看護を実践し、母性看護の役割を理解することができるとし、母性看護学実習を3年次通年の2週間(10日間)展開している。学生は2年次前期から後期にある母性看護学の講義や演習で多くの事を学び、実習直前オリエンテーションなどで知識・技術の確認に時間をかけて準備し実習へ臨んでいる。しかし、実習を担当した教員から、学生が対象者のプライバシーを重視することで知識や技術の活用がうまくできない現状を聞き、実習で体験していくことと学内演習内容が一致しているか疑問であると考えた。

学生の現状は、生活体験の少なさや実習以外の場で妊産婦や子どもにふれあう機会が少ない。¹⁾ そのために母性看護学の学習効果をねらうことが非常に難しい状況にあると考える。妊産褥婦や新生児をより良い状態に維持するため、対象の状態や状況に応じた援助を計画・実施できるよう看護過程の習得ができるよう学習計画をしてきた。しかしながら、学習を進めるにあたり講義や演習内容での学習が活用できていない現状が見えてきた。

以上から、本学の母性看護学実習における技術経験の現状と学内での学習内容との相違を知り、母性看護学実習における看護技術の現状と今後の課題を明らかにしたいと考えた。

I 母性看護学概要

母性看護学実習の実習展開は、主に正常な母子1組を

受付日 2014年12月15日

受理 2015年1月21日

受け持ち看護展開している。実習対象施設は、5ヶ所あり、年間平均約600件の分娩件数がある総合病院である。通年で4月～10月までの実習期間で2週間毎に展開している。また、月曜から木曜日が実習施設、金曜日は、学内でカンファレンスを実施しており、ひとグループを4名から6名とし、全16グループで展開している。

Ⅱ 研究目的

本学の母性看護学実習において学生の看護技術経験状況を明らかにし、学内演習項目の学習内容との相違と今後の課題を明らかにする資料とする。

Ⅲ 研究方法

1. 研究対象

平成26年度母性看護学実習を終了した3年次の学生85名

2. 調査期間

平成26年4月21日～平成26年10月31日

3. 調査内容

本校が作成した卒業時における看護技術到達チェックリスト（計136項目）をもとに母性看護学実習で経験した技術に関する（計51項目）について調査した。（母性看護学実習技術経験アンケート表）

4. 分析

母性看護学実習終了後、実習中の技術体験に関する調査内容に学生が自己記入し提出されたものを収集（85名中84名が回答、回答率98.8%）後、Microsoft Excel 2013にて単純集計しデータ化した。

5. 倫理的配慮

調査時期は、母性看護学実習終了後と全領域実習終了後に調査した。調査の際、看護学生に調査の趣旨を説明し調査用紙を配布した。調査用紙は無記名で、個人が特定されないようにすること、責任をもって廃棄することを口頭で説明し、同意の得られた学生に実施した。

表1 母性看護学実習技術経験アンケート

実習中に見学又は実施した看護技術について伺います。該当するところの()内に○印をつけてください。
尚、実施は単独実施と教員及び指導者と共に実施の両方を含みます。
見学・実施の両方をつけても構いません。その他の欄は、項目以外に経験したことがあればご記入ください。

	技術項目	見学	実施		技術項目	見学	実施
妊娠前・外来を含む	子宮底長・腹囲の測定			産褥期	出産(直)後の状態観察		
	胎児の発育状態の確認 (超音波検査含む)				外陰部消毒		
	レオポルド触診法				悪露の観察		
	分娩監視装置による健康状態の観察				子宮の復古の観察		
	心理的・社会的側面に関する支援				創傷の治癒過程		
	バイタルサインの測定				バイタルサイン測定		
	胎児心音の聴取				乳房の観察		
	日常生活指導				母乳分泌促進(乳房管理)		
	母親学級				搾乳技術の指導・支援		
分娩期	分娩監視装置による陣痛・胎児心音の観察			全身状態の観察			
	分娩第1期進行状態の観察			産褥指導・その他の指導 (個別指導含む)			
	産痛緩和			沐浴指導			
	部分清拭			活動休息の援助			
	基本的欲求の充足			産褥期の不快症状の緩和			
	分娩第2期の援助			感染予防			
	胎盤計測			地域サービスの活用			
	満足のいく分娩への支援			新生児期	ルービンの母親役割行動の適応過程に沿った援助		
	出生直後の観察				生理的変化の観察 (体重減少、黄疸、臍、排泄、活気)		
アプガースコア判定			家族関係再構築に関する援助・指導				
身体計測			感染予防(手洗い、臍処置含む)				
早期母児接触			哺乳意欲に合わせた授乳の援助				
その他	NICUへの面会付き添い				おむつ交換		
	K2シロップ内服				授乳中の観察		
					ビン哺乳中の観察		
					沐浴		
				清拭(ドライテクニック)			
				衣服の着脱			
				母児同室のオリエンテーション			

Ⅲ 結果

1. 妊娠期（外来含む）の看護技術経験状況（図1）

妊娠期（外来含む）の看護技術、9項目の中で学生の半数以上が見学できた技術（図1）は、「胎児の発育状態の確認（超音波検査含む）」49名、次に「子宮底長・腹囲の測定」47名、「胎児心音の聴取」44名、「レオポルド触診法」43名であった。また、経験人数が少ない技術は、「心理的・社会的側面に関する支援」28名、「バイタルサイン測定」29名であった。

また、学生の半数以上が実施した技術は、「子宮底長・腹囲の測定」「レオポルド触診法」が共に59名、次に「バイタルサイン測定」37名、「胎児心音の聴取」37名であった。また、経験人数が少ない技術は、「母親学級」5名、次に「分娩監視装置による健康状態の観察」6名、「日常生活指導」14名であった。

2. 分娩期の看護技術経験状況（図2）

分娩期の看護技術、12項目の中で学生の半数以上が見学できた技術（図2）は、「アプガースコア判定」51名、次に「身体計測」45名、「早期母児接触」42名であった。

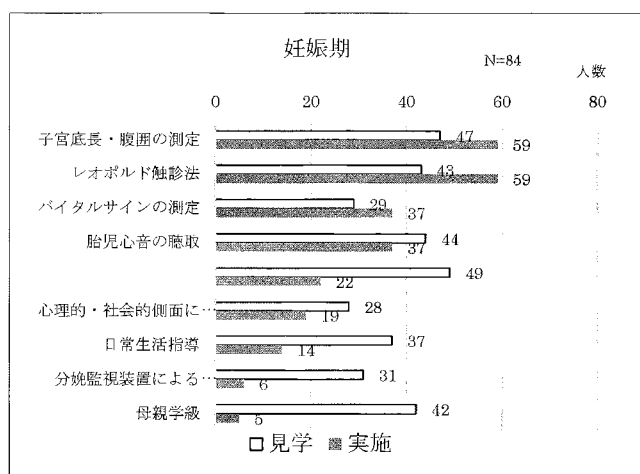


図1

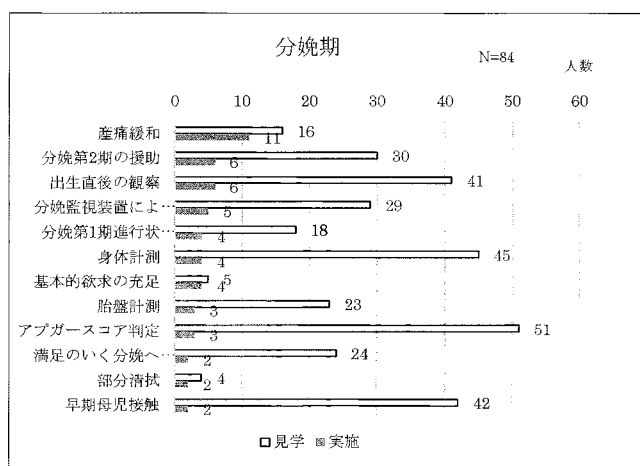


図2

また経験人数が少ない技術は、「部分清拭」4名、次いで「基本的欲求の充足」5名であった。そして、「分娩第2期の援助」30名、「分娩第1期進行状態の観察」18名であった。

また、学生の半数以上が実施した技術は、「産痛緩和」11名、次に「分娩第2期の援助」6名「出生直後の観察」6名であった。また、経験人数が少ない技術は、「早期母児接触」「満足のいく分娩への支援」「部分清拭」の3項目がいずれも2名であった。

次に「胎盤計測」「アプガースコア判定」は、いずれも3名であった。「分娩第1期進行状態の観察」「基本的欲求の充足」「身体計測」は、4名であった。

3. 産褥期の看護技術経験状況（図3）

産褥期の看護技術、16項目の中で学生の半数以上が見学できた技術（図3）は、「産褥指導・その他の指導」60名、次に「沐浴指導」59名、「子宮復古」55名であった。また、経験人数が少ない技術は、「地域サービスの活用」9名、次に「感染予防」27名、「外陰部消毒」21名であった。

そして、「悪露の観察」37名、「活動休息の援助」35名、「創傷の治癒過程」33名、「産褥期の不快症状の緩和」29名であった。

学生の半数以上が実施できた技術は、「バイタルサイン測定」83名、次に「全身状態の観察」78名、「子宮復古の観察」76名であった。また、経験人数が少ない技術は、「外陰部消毒」0名、次に「地域サービスの活用」1名、「沐浴指導」7名であった。そして、「創傷の治癒過程」「産褥期の不快症状の緩和」は、いずれも22名、「悪露の観察」26名、「活動休息の援助」36名であった。

4. 新生児期の看護技術経験状況（図4）

新生児期の看護技術、12項目の中で学生の半数以上が見学できた技術（図4）は、「沐浴」60名、「おむつ交換」56名、「衣服の着脱」52名、「授乳中の観察」51名であった。

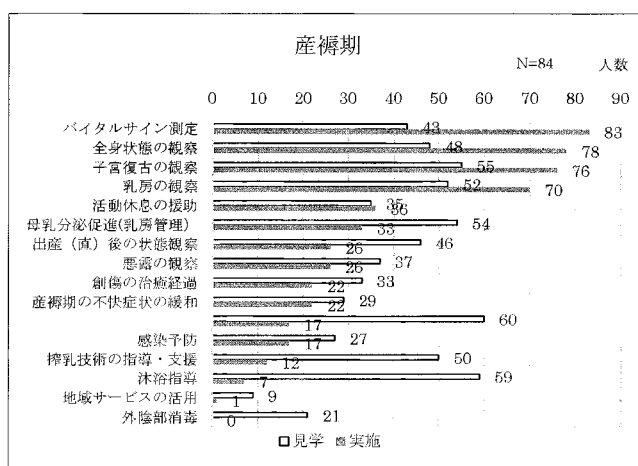


図3

また、経験人数が少ない技術は、「家族関係再構築に関する援助・指導」17名、次に「ルービンの母親役割行動の適応」18名であった。そして、「授乳中の観察」51名、「哺乳意欲に合わせた授乳の援助」49名、「生理的変化の観察」46名であった。

また、学生の半数以上が実施した技術は、「生理的変化の観察」74名、次に「感染予防」61名、「おむつ交換」55名であった。また、経験人数が少ない技術は、「母児同室のオリエンテーション」8名、次に「家族関係再構築に関する援助・指導」9名、「ルービンの母親役割行動の適応過程に沿った援助」12名の順であった。そして、「授乳中の観察」55名、「衣服の着脱」51名、「沐浴」29名、「哺乳意欲に合わせた授乳の援助」18名、「清拭（ドライテクニク）」17名であった。

その他で見学できた技術（図5）は、「ビタミンK2シロップ」39名、「NICUへの面会の付き添い」2名、「母乳外来」1名であった。そして、実施では、「ビタミンK2シロップ」3名、「NICUへの面会の付き添い」10名であった。

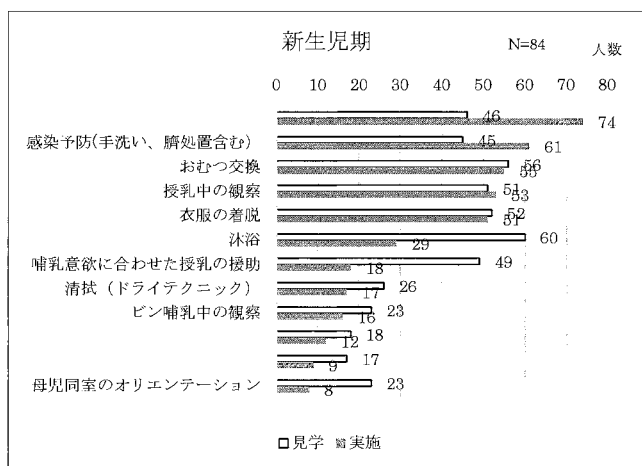


図4

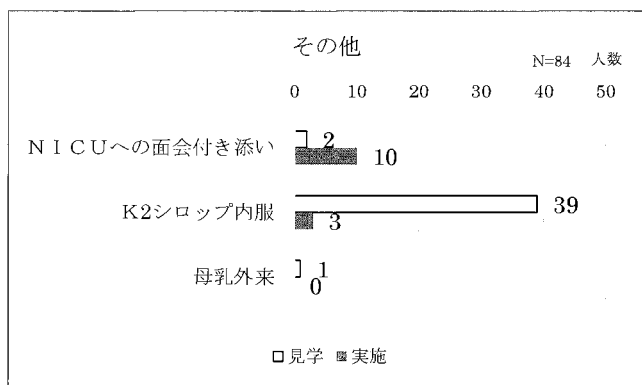


図5

Ⅳ 考察

1. 実習中の看護技術経験と学習内容

学生の半数以上が経験した母性看護学技術は、妊娠期では、「子宮底長・腹囲の測定」「レオポルド触診法」の2項目、分娩期では、「産痛緩和」の1項目、産褥期では、「バイタルサイン測定」「全身状態の観察」「子宮復古の観察」「乳房の観察」の4項目、新生児期では「生理的変化の観察」「感染予防」「おむつ交換」「授乳中の観察」「衣服の着脱」の5項目の計12項目であった。

また、見学の技術経験の項目は、妊娠期では、「胎児の発育状態の観察」「子宮底長・腹囲の測定」「胎児心音の聴取」「レオポルド触診法」の4項目、分娩期では、「アプガースコア」「身体計測」「早期母児接触」「出生直後の観察」の4項目、産褥期では、「産褥指導・その他の指導」「沐浴指導」「子宮復古の観察」「母乳分泌促進」「乳房の観察」「搾乳技術の指導・支援」「全身状態の観察」「出生直後の観察」の8項目、新生児期では、「沐浴」「おむつ交換」「衣服の着脱」「授乳中の観察」「哺乳意欲に合わせた授乳の援助」の5項目の計21項目は、学生の半数以上が見学による技術経験ができていた。

妊娠期中で経験した技術、「子宮底長・腹囲の測定」「レオポルド触診法」の2項目は、その実施および結果から判断が加味されている技術であり、実習中に学生が経験できていた。そして、学生は、学内で学んだことを活用してアセスメントにつなげていた。このことから、学内で実施した演習内容と一致していることがわかった。

しかしながら、見学および実施において「心理的・社会的側面に関する支援」「日常生活指導」の2項目は、いずれも経験人数が少ない。このことから、妊娠期の心理的・社会的変化の学習や日常生活に関するアセスメントや妊婦が受ける母子保健サービス、親になるためのアセスメントに関する学習には到達していないことが考えられる。学内で妊娠中に起こりうるマイナートラブルや日常生活のアセスメントに関する学習と実習での技術経験が関連するように学習支援する必要がある。

妊娠期中にある対象とのかかわりにおいて観察技術や指導技術が中心となりやすい。母子の健康状態をとらえることが、出産に向けて心身ともに健康を維持しながら妊娠継続できるかどうかを援助する必要性がある。そのことを学生が実習の中で体験したことが学習につなげられるよう指導することが求められる。また、演習で実施している妊娠期中にある対象と胎児の健康状態の理解につなげるために臨地実習でしか学べない「分娩監視装置による健康状態の観察」体験の機会をできる限り多くもてるように実習指導者と調整することが求められる。

分娩期の技術である「分娩第1期進行状態の観察」「分娩第2期の援助」は、見学や実施合わせて経験人数が20～30名であった。中でも「産痛緩和」は、分娩進行中の

産婦と直接的に関わる援助であり、指導者より助言を受けながら共に実施する看護技術となる。「産痛緩和」の技術を経験することで、学内で学習している分娩期の看護の実際について学べていた。しかし、「基本的欲求の充足」への援助や「満足のいく分娩への支援」などの環境調整を含む援助項目は、見学や実施のいずれも経験人数が少ない。分娩は生理的な現象であるが、個人差や変化が大きく、産婦と胎児の健康状態に様々な影響を及ぼす。そのため分娩経過中に学生がとらえた援助について学内演習内容と一致できると分娩見学時の看護として意味づけができると考える。

そして、「アプガースコア」「身体計測」など児の出生直後の観察技術の見学経験者が多かった。実際に指導者の助言をもとに実施した学生は、出生直後の新生児の状態の評価が適切で、その後日々の観察が適切に実施できていた。今後、分娩に立会える機会が少ない現状の中、学内演習で分娩期の看護の学習をどのようにして補うのが課題となる。

産褥期で経験した技術、「バイタルサイン測定」「全身状態の観察」「子宮復古の観察」「乳房の観察」の4項目は妊娠期と同様に観察が中心となる看護技術であり、観察技術の実施経験人数が多かった。また、見学では、「産褥指導・その他の指導」「沐浴指導」など指導場面の見学を通して、産褥期における日常に関することや生活育児技術に関わる援助を学んでいることがわかった。

産褥期では、分娩時間により長引いた場合や夜間の分娩である時、更に疲労度が増す。また、後陣痛や会陰裂傷が生じることによる痛みによって身体回復の妨げになり、育児行動を含む活動や休息にも影響することがある。分娩後の離床が円滑に行えるかどうかを把握するには、「創傷の治癒経過」「産褥期の不快症状の観察」も必要であるが、技術経験としてこの2項目は経験人数が少なかった。その背景として、実習の中で学生は、帝王切開術後の褥婦を担当し看護の中での「創傷の治癒過程」に触れることもあるが、会陰裂傷によっておこる「創傷の治癒過程」と結びつきにくいのではないかと考えられる。「創傷の治癒過程」の理解は、学内で学習する産褥期の身体的変化や褥婦の健康状態のアセスメントと関連するため、技術経験を意味づける必要がある。また、「悪露の観察」「母乳分泌促進」について実施経験人数が少ない現状がある。母性看護学では健康な対象者が中心であり、プライバシーに関わる看護技術において配慮を要するものが多い。そのため、学生が担当する褥婦の全ての援助や医療処置場面に関われないという背景が考えられる。²⁾

新生児期で経験した技術、「生理的变化の観察」「感染予防」「おむつ交換」「授乳中の観察」「衣服の着脱」の5項目は、学生の半数以上が実施できていた。これは、

多くの学生が母子を同時に受け持つことで、日々の観察や関わりの機会が得られやすい。このことは、出生直後から退院時までの看護の学習とつながっていることがわかった。

以上から、学生が学内演習で学習した内容は、実習で概ね学べていることがわかった。入院期間が短期間であるため、何を習得させるかを対象の状態や状況に合わせて、技術経験と演習内容が一致できるよう学習支援する。そのためには、学生が実施した看護技術体験の振り返りをもとに常に演習内容を想起させながら、学習がつながるように支援する必要がある。^{2) 3)}

2. 看護技術経験の意味づけ

学生は、「卒業時における看護技術到達チェックリスト」(計136項目)を使用し、技術経験の意味づけを行っているが、助言を受けて技術経験したことが結果として残されていないことが多かった。一部の学生は、実習中に実施した観察や援助をとおして、技術習得するという意識を持ちながら実習をしており、技術経験をともに日々の観察技術や産後の援助に結びつけていた。

しかし、一部の学生は、指導者と共に実施した観察や援助や見学した技術に対しての自覚が乏しいため、技術の見学及び実施経験としての結果が残らないことがわかった。そして、技術経験がその後の学習に活用されず、意味づけに時間を要していることが見えてきた。

今後、オリエンテーションの際、母性実習で行う技術についてチェックリストのどこに該当するか説明し、技術経験から何が学べるかを明確にし、学習修得の支援が必要であると考えられる。^{4) 5) 6)}

V 結論

1. 学内での講義・演習での学習内容は、妊・産・褥婦および新生児期における臨地実習での看護技術経験とほぼ一致していた。
2. 妊娠期のマイナートラブルや日常生活のアセスメントの学習と学内の妊娠期に必要な看護技術経験が一致できるよう学習支援する必要性がある。
3. 分娩の立会いが少ない中で学内演習として分娩期の看護の学習をどのように補うのか検討が必要である。

参考文献

- 1) 濱 耕子：基礎看護教育における母性看護学実習の取り組みと今後の課題、県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要、5、81、(2004)
- 2) 成田 恵美子 他：母性看護学実習における学生の看護技術経験の認識に関する調査、秋田大学医学部保健学科紀要、15 (1)、58、(2007)
- 3) 井上 歩美 斉藤 早苗 他：母性看護学実習におけ

る学生の学びと実習目標との関連性、ヒューマンケア研究学会誌、2、36、(2011)

- 4) 笹木 葉子 小堀 ゆかり：母性看護学実習における学生の技術経験状況調査—学生の母性看護学実習技術チェックリストから—、北海道文教大学研究紀要、36、81、(2012)
- 5) 厚生労働省医政局看護課：基礎看護学における技術教育の在り方に関する検討会報告書、厚生労働省、<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0317-4.html>、2014.08.11
- 6) 野嶋 佐由美：「コアとなる看護実践能力」と「卒業時到達目標」の参照基準としての妥当性 文部科学省 平成22年度 先導的大学改革推進委託事業 看護系大学におけるモデル・コア・カリキュラム導入に関する調査研究報告書、第5章、90、(2012)

著者への連絡先：前山直美 山本江里子 石川智子

〒238-8580 神奈川県横須賀市稲岡町82番地 神奈川歯科大学短期大学部 看護学科

TEL：046-822-8780 FAX：046-822-8787

E-mail：maeyama@kdu.ac.jp

e.yamamoto@kdu.ac.jp

tishikawa@kdu.ac.jp